

解答

一　問一　あげくのはて

問二　イ

問三　エ

問四　イ

問五　ウ

問六　オ

問七　ウ

問八　オ

問九　ウ

問十　ウ

問十一　ア

問十二　ウ

問十三　●

問十四　●

問十五　オ

問十六　オ

問十七　オ

問十八　オ

問十九　オ

問二十　オ

問二十一　オ

問二十二　オ

問二十三　オ

問二十四　オ

問二十五　オ

問二十六　オ

問二十七　オ

問二十八　オ

問二十九　オ

問三十　オ

問十一　本文の後半に「自分自身の内なる声を聞くことができてこそ、他者の気持ちを推し測ることができ、その声に耳を傾けることができると思いまして、自分自身との対話ができてこそ、他者との対話もできると思うのですが」と、筆者の主張が述べられています。

解説

平凡で単調だと感じていた毎日にこそ新しい知識の学びや面白いことが満ちていて、一度とくり返されることのない貴重な時間だということ（を学んだ。）

二

問八

本文の最後で、ずる休みをした「私たち」は、「すぐ二人とも、自分の学校の今日の教室を連想した。」「あして同級のひとたちは習っていたのだ。」「永久に今日の教室でのことを、私と赤木さんは知ることが出来ないのだ。」「私たち二人の知らないことを教えられないことを、同じ級の人は知つたり聞いたりしてしまったのだ！」とあり、平凡で単調だと感じていた学校生活の毎日で新しい知識を得る喜びやそれがいかに貴重な時間であるかを知った様子がうかがえます。